



第四金曜日は映画の日

上映会 11/25 (金)

名匠 川島雄三 大傑作の予兆を感じる2作品

とんかつ大将 10:30



1952年、94分、監督・脚本：川島雄三、出演者：佐野周二、津島恵子、角梨枝子、高橋貞二、三井弘次

長屋に住む青年医師・荒木勇作は、俗称「とんかつ大将」と呼ばれみんなに親しまれていた。自分の住む長屋が悪徳弁護士の手で取り壊されるのを阻止しようと反対運動を起こすのだが…。没後に作品が再評価されている川島雄三監督の松竹時代初期作品。

あした来る人 13:00



出演：山村聰、三橋達也、月丘夢路、新珠三千代、三国連太郎

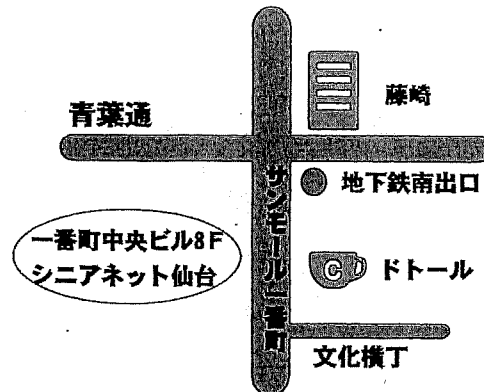
1955年、115分、監督：川島雄三、原作：井上靖、脚本：菊島隆三、音楽：黛敏郎、助監督：今村昌平

朝日新聞社連載、井上靖の同名小説の映画化。若き女性の悩みと抵抗、新しき時代の愛情のあり方を描いた文芸巨編。日活製作再開一周年記念映画であるこの作品は、映画界の第一線級のスタッフ、キャストで編成されている。

参加費 1作品につき 800円

「映画村会員」
「シニアネット会員」の方 500円

会場：NPO法人 シニアネット仙台
「一番町サロン」
TEL 022-266-5650
仙台市青葉区一番町2-5-12
一番町中央ビル8F
地下鉄東西線「青葉通一番町駅下車」南出口1分
ドトールコーヒー仙台サンモール店 向いビル



川島雄三

かわしまゆうさう 大正七年(一九一八)〜昭和三十八年(一九六三)



いまやカルト的人気の監督だが、生前は『暮末太陽傳』(57年)、『雁の寺』(62年)、『しとやかな獣』(62年)などを除いて決して高い評価を受けていたわけではない。弟子の今村昌平、浦山桐郎が一作、作家性の強い作品を仕上げるのに対して、この人はプログラム・ピクチャ出身の量産の人。六三年に四十五歳の若さで亡くなるまで五十一本も作った。しかも玉石混濁。珍作、失敗作も傑作同様が多い。その混在ぶりが逆にいまや魅力になっている。

直球より変化球を好む。芸術的大作などハナから作るうと思っていない。乾いている。日本的抒情とは無縁。渋谷実、市川崑、中平康らと同じ系列。皮肉なコメディ、ブラックな諷刺劇を愛する。過激な戯作者。トリックスター。

川島作品によく出演した小沢昭一は川島を評して「パターン嫌い」といつている。「およそなにが嫌いつてパターンが嫌いな人なんですよ」「型」とおり紋切り型では収まらない人間の複雑さとか怪奇さだとか、矛盾だとか、そういうものをこよなく愛するというか、はみだす部分を大事にする。欠点は、はみだしを愛し過ぎてそこを追っかけ過ぎたために、根本のところは何だか訳わからなくなっちゃうって場合が多いことね(笑)。(「ユリイカ臨時増刊・川島雄三」)



①『雁の寺』(1962) 出演：若尾文子(写真左)／三島雅夫(右)／木村功／高見国一／中村錦治郎／山茶花究

89年)。

『暮末太陽傳』にフランキー堺の居残り左平次と石原慎太郎の高杉晋作がこちらを向いて並んで小便をする有名な場面があるが、川島作品にはいたるところにパターン破りがある。『雁の寺』で、若尾文子が便所に入り、そのあと高見国一の小坊主が汲み取りをするツグソ・リアリズムも有名だ(成瀬巳喜男の作品によくチンドン屋が登場するように、川島作品にはよく便所が出てくる)。

松竹映画『学生社長』(53年)にはこんな人を見たギヤグがある。学生の鶴田浩二がアルバイトで外国人観客を芦ノ湖に案内し、富士山を見せる。と、突然、観客のほうに向かいにつこり笑って皆さんもさきほじ見ましたね(無論、松竹のマークの富士山のこと)。

『赤坂の姉妹・夜の肌』(60年)では淡島千景と新珠三千代という二大美人女優が取組み合いの大ゲンカをはじめめる。女であること(58年)では酔払った久我美子がなんと原節子の唇にキスをする。

パターン破りだから、団地の一室だけを舞台に『しとやかな獣』を作ってしまったのも驚かない。この映画には、欲の皮の突っ張った連中ばかり出て来るが、川島雄三の映画には、一風変わったアウトサイダーがよく出てくる。それもあまり本筋と関係のない

ところにおいて、それでいて目立ってしまう。

『あした来る人』(55年)の三國連太郎はカジカという魚の研究に没頭している。いまふうにいえば魚おたくで、せっかくな月丘夢路という天下の美女が近づいてきても魚の話ばかりしている。山村聰は金持の実業家のくせになぜか自分で風呂を焚くのが好きという奇癖がある。『雁の寺』の山茶花はカメラに凝っている。『箱根山』(62年)の佐野周二は本業の旅館はそっちのけで郷土史に没頭している。『貧問あり』(59年)など、ネコを殺して佃煮にしよう益田喜頓はじめ、出てくるのは奇人変人ばかり。原作者の井伏鱒二があきれて「どぎつく、きたない」と酷評した。

大正七年(一九一八)、青森県田名部町生まれ。一九三八年、松竹大船入社。最初に助監督としてついたので渋谷実監督だったというからその謹厳精神は渋谷ゆすりかもしれない。右手、右足が不自由だったという(『風船』56年の、身障者芦川いづみにそれが反映されている)。世をすねたような戯作精神はあるいはこれが一因か。川島映画のヒロインはまず新珠三千代。『あした来る人』『風船』とともに楚々とした愛人を演じ、そのあと転じて『洲崎バラダイス』(56年)ではちよつと崩れた蓮つ葉な女。次のヒロインは若尾文子。『女は二度生まれる』(61年)でも『雁の寺』でも、汚れた女のようにでいて意外と情にもろく、男にやさしい。川島雄三はこんな女が好きだったのだろう。

水と油に見える成瀬巳喜男と合作で『夜の流れ』(60年)を作ったのは驚き。しかも、成瀬らしいしっとりとしたパートが実は川島の演出なのだという。

(川本三郎)